

マイコプラズマ肺炎患者が急増

新型コロナ対策影響か

呼吸器感染症の一つ「マイコプラズマ肺炎」の患者数が過去10年で最多のペースで増えている。国立感染症研究所が27日に発表した速報値では、12～18日に全国の定点医療機関から報告された患者数は625人（1機関当たり1・3人）で、前年同時期の40倍超と



症化して呼吸不全となることもある。

川崎医科大学の大石智洋主任教授（感染症学）によると、ほぼ4年に1回の周期で流行し「オリンピック肺炎」の異名もある。大石氏は「今回は流行2回分が一度にきている状態だ」と指摘する。

感染研によると、患者数は7週連続で増加。過去10年で最多だった2016年の同時期（1機関当たり0・88人）よりも多い。新型コロナ流行後の20～23年は、1機関当たり0・01～0・05人と激減していた。

大石氏は「感染力は新型コロナより弱いので、しっかりマスクを着用すれば防げる可能性が高い。発熱し、せきの症状が強ければ早めに受診してほしい」と呼びかけている。

なった。新型コロナウイルス対策で患者が減り、免疫を持たない人が増えたことが原因とみられる。岡山県は2人（同0・4人）、広島県47人（同2・24人）だった。

マイコプラズマ肺炎は「肺炎マイコプラズマ」という細菌に感染して発症し、発熱や頭痛、せきといった症状が出る。軽症で済むことが多いが、一部は重